

三重県の歴史街道

三重県は、様々な「街道」を通じた歴史・伝統のある文化の豊かな地域です。

「街道」には工芸や文学、食などの文化、さらには旅人に対するもてなしの心や祭り・習慣・民話に至るまで「街道遺産」ともいえる有形・無形の歴史的な遺物がたくさん残されています。これらの「街道遺産」は、どのような魅力をもっているのでしょうか。



とうかい 東海道

東海道は古くから都と東国を結ぶ最重要ルートとして栄え、徳川家康の時代には中山道・奥州道中・甲州道中・日光道中とともに五街道に数えられました。

いせ 伊勢街道

「伊勢に行きたい伊勢路がみたい。たとえ一生に一度でも」と伊勢音頭にも歌われ、多くの人があこがれた伊勢参り。伊勢国の幹線道路として、旅人だけでなく地元の人々にも利用されていました。

大和街道

大和街道は関の西の追分で東海道から分岐し、三重県を抜けて奈良へと続き、木津川の水運につながり淀川を経て京都・大阪へと人々を導いた重要ルートです。

伊賀街道

伊賀街道は、伊勢・伊賀二国の大名藤堂高虎が、伊勢・伊賀大名となった後、津(本城)と上野(支城)をむすぶ最も重要な官道として整備された街道です。

伊勢別街道

伊勢別街道は、「いせみち」「参宮道」「山田道」などと呼ばれ、幾つかの宿場町を持ち、江戸時代には京都方面からの参宮客でにぎわいました。

初瀬街道

京・大和方面と伊勢を結ぶ初瀬街道は、現在の松阪市六軒から青山峠を越え、名張を経て奈良県の初瀬(長谷)へと至ることからその名が付けました。古くは「青山越」「阿保越」、参宮表街道、参宮北街道とも呼ばれ、斎王が伊勢へと赴いた道でもありました。

伊勢本街道

大和国と伊勢神宮を結ぶ伊勢本街道は、別名・参宮本街道、伊勢中街道とも呼ばれていました。現在でも、旧宿場町に残された道標や常夜燈、古い町並みがかつての姿を今に伝えています。

和歌山街道

江戸時代に紀州藩の本城と東の領地松阪城を結ぶ街道として、伊勢参宮や熊野詣、吉野詣の巡礼道として、または南紀や伊勢志摩の海産物などを大和地方に運ぶ交易路として栄えた街道でした。

和歌山別街道

和歌山別街道は紀州藩の本城と田丸城を結び、途中で熊野街道や伊勢本街道と合流し、伊勢参宮の道として多くの旅人に利用されました。

二見道

伊勢街道(古市街道)の小田橋から勢田川沿いに河崎、二軒茶屋等を経て伊勢市二見町の夫婦岩(二見興玉神社)へと続く道で、途中で朝熊村(現在の伊勢市朝熊町)からの道が合流しています。

鳥羽道

鳥羽道は志摩市磯部町上之郷を起点に、近鉄志摩線・近鉄鳥羽線とほぼ平行に走り伊勢へと続く街道です。

磯部道

磯部道には、七曲り八曲りと言われた急坂の逢坂峠がありましたが、この峠を越える道は明治26年に大改修され、それ以前の古道はほとんど使用されなくなりました。

濃州道のうしゅう

三岐鉄道北勢線とほぼ平行に通る濃州道は、桑名では員弁街道と称されています。この街道は員弁郡下から桑名城下へと続く道として発展し、街道沿いには今でも美しい家並みが存在しています。

美濃街道みの

一般に美濃街道とは、尾張の東海道宮宿と美濃の中山道垂井宿をつなぐ脇街道のことをいいますが、江戸時代には、桑名から長良川に沿って美濃へと通じる街道を美濃街道とよんでいました。今でも桑名市の参宮通には、「右みの多度みち」と刻まれた道標が建っています。

巡見道じゅんけん

江戸時代に幕府の巡見使が通ったことからその名が残っています。県内の巡見道は、亀山市の東町で東海道から分かれ、現在の国道306号を縫うようにして北上しています。

八風道はっふう

八風道は四日市市富田一色を起点としてすぐに東海道と交差し、大矢知、平津を経て菰野町田光で巡見道と合流する道です。

現在では、一部は道が拡張されましたが、いかにも街道らしい道幅を残しているところも随所に見られます。

菰野道こもの

菰野道は、東海道四日市宿と菰野一万石の城下を往来する道で、城下町や湯の山を訪れる旅人をはじめ、参勤交代で江戸に向かう菰野藩主も通りました。

熊野街道くまの

伊勢神宮と熊野三山を結ぶ街道で、多くの客や熊野詣の旅人でにぎわいました。馬越峠や松本峠など、あちこちに苔むした石畳の道が残り、難所の多かった熊野街道の旅のきびしさを、街道沿いに立つ地藏や墓石が静かに伝えています。

熊野脇道くまのわき

熊野三山を目指す熊野街道の脇道。玉城町田丸で本街道から分岐して度会町に入り、そこから宮川沿いに大紀町に出て熊野街道に結ぶ道と、一之瀬谷や野見坂峠を経て南伊勢町の熊野灘沿岸をたどり、紀北町で本街道に結ぶ道があります。